

夫婦で冒険者！

奥さんは魔女。
旦那さんは寝取られマソ。

第三章 学生時代！奪われた魔女の処女

八ヶ岳昌司



地獄。

限りなく続く苦しみの中、女の魂は呻く。

考えうる限りの、想像を越えた不幸という不幸が、女を襲う。

ありとあらゆる大切なものは奪われ、剥ぎ取られ、失われる。

目に映るすべてのものは敵でしかなく、そこには裏切りと憎しみしか存在しない。

ひとつの光が射す。

何も信じなくなっていた女の心は、猜疑心と不安に囚われ、明るい光に怯えてそこから逃げようとする。

だがその光はあたたかく、どこか懐かしい。

女は思わず手を伸ばす。

その光は女をつかむと、はるか上方めがけて飛び上がる。

追いつがるいくつもの炎の中、女はいっしか赤い川の上を飛んでいる。

光に包まれ、女はいっしか安息の中にいる。

時間の観念の無い魂の揺りかごの中、女はいっしか赤子へと戻り、あどけない声を上げる。だがその手は、あたたかな光をいつまでも離さずにいる……

寄宿舎のベッドの上、ミユリは目を覚ます。

先ほどまで見ていた夢のことはもう忘れている。

けれども、とても苦しい夢を見ていた気がする。

親元を離れ、この王立学園の寄宿舎で生活するようになってから、悪夢を見ることが多くなつた。

今まではこんなことは無かつたのに。

親元と言つても、ミユリの両親は本当の親ではない。

孤児だつたミユリを引き取つて育ててくれたオクヤマ夫妻。彼らが血のつながつた本当の親ではないことを、なぜだかミユリは小さい頃から知つていた。

周囲の子供たちと比べて明らかに発達した知能と、不思議なほどの勘の良さで、子供たちばかりか大人たちからも気味悪がられていたミユリが、ずっと心の支えとしてきたのは、近所に住む幼馴染のタチバナという少年だつた。

ミユリと同様に孤児であり、血のつながらない親の下で育つその少年と、ミユリは物心つい

た頃からずっと一緒に、初級学校の頃も、中等課程に進んでからも、共に学び、共に過ごしてきた。

だが魔法の分野に素質のあったミユリがその才能を見出され、本来であれば十五歳にならなければ入学できない王立学園の由緒ある魔法学部にて、十三歳で入学することになったのは一年前のこと。

それ以来、生まれて初めてミユリは両親と、そしてタチバナと離れて暮らすことになった。それまで当たり前のようにそこにあり、隣にいてくれた友人の存在。

離れてみて初めて、それがいかに大きな存在であったのかを、ミユリは感じていた。

（タツちゃんが居てくれたから、私はこれまでやってこれたんだ……）

偉大な魔術師の師匠と、最高の環境の下で、本格的な魔法の勉強を始めたものの、この一年、ミユリの心の中にはぽっかりと穴が開いたようだった。

歳の離れたクラスメイトに囲まれ、また一人だけ黒魔法の特別コースを履修し、この一年、

ミユリにはこの王立学園で友人らしい友人もない。

学部内でも特別扱いされ、周囲とは別の英才教育を受けるミユリが、他の学部生から拝領した渾名は『魔女』。

それは魔術史の教科書に載っている大昔の魔女の肖像画がミユリに似ていたことから着いた渾名だが、理由の半分はミユリが普段から周囲と溶け込まず、人を寄せ付けない怖い表情をしているからだということに、ミユリは自分で気が付いていなかった。

孤独の中で、ひたすらに魔術の修行に打ち込む生活。

そんな学園生活も、今日から二年目を迎える。

午前八時。

寄宿舎はばたばたとした喧噪に包まれ、学園生たちは皆、制服に着替えると、次々に講堂に集まっている。

遅れてくる者たちもいるが、優等生であるミユリは誰よりも早くやって来て、最前列のいちばん左端にある席に座る。友人のいないミユリにとって、ここは孤独を感じずに済む居心地の良い場所なのだ。

やがて学生たちが集まり、壇上の照明が点いて、始業式が始まる。

一年前、初めてこの講堂に来て、不安な気持ちで一番後ろの席に座っていたミユリも、今日から二回生となるのだ。

壇上では白髪の学園長が挨拶すると、次いで今日からこの学園での生活を始める新入生たちへ向けての祝辞を述べ始めた。

「この伝統あるサトの王立学園は、この国に五箇所ある王立学園の中で、規模こそ最も小さいが、その歴史は最も古く、数多くの騎士、将軍、政治家を輩出している。また我が校の魔法学部は少人数制でありながら、その実践と研究の両分野において、国内でも最高水準と言われている。そんな我が校の生徒として、新入生となる皆も誇りを持ち、それぞれが研鑽に励んでもらいたい……」

新入生とは言っても、二年早く入学したミユリからすれば、ひとつ歳上の学生たちである。自分が周囲から切り離されて英才教育を受けていることについて、恵まれているとは思うものの、頭の上を通り過ぎていく祝辞の言葉を聴きながら、ミユリの孤独感はさらに深まった。

「……では、新入生を代表して挨拶をしてもらう。代表のスピーチは、入学試験において最も優秀な点数を残したタチバナ・クラウチ君にお願いする」

学園長がそう言つて手を上げると、眼鏡をかけ、学生服を着た一人の男子生徒が講壇に向かつて歩いて来る。その顔を見て、ミユリは思わず「あつ」と声を上げてしまった。周囲の学生たちがミユリの方を見、ミユリは恥ずかしそうに口に手を当てる。

（タ、タツちゃん……!?）

講壇の脇に立つたタチバナを学園長が紹介する。

「タチバナ君は、昨年十三歳で入学したミユリ・オクヤマ君同様、本来であれば十五歳にならなければ入学を許されない我が校に、今年十四歳で入学することになった。また彼は魔術師協会の推薦によらず、地方魔術検定にて満点の成績を収め、自力で特別入試の機会を手にした努力家でもある。このように我が学園は実力主義によって運営されている。皆もその事を肝に命じ、それぞれの家柄や身分に囚われることなく、学業に励むよう……」

紹介が終わり、タチバナが真面目な顔で講壇に立ち、スピーチを始める。

だがミユリは最早彼が何をしゃべっているのか聞こえなかった。ただ、その懐かしい友人の顔を、ひたすらにじつと眺めていた。

始業式が終わり、学生たちが講堂から出ていく。

ミユリもクラスメイトたちに混じり、講堂を出て、それぞれに授業が待つ校舎へと向かおうとしていたが、向かいの校舎の入口近くにひとつの人影を見つけると、突然ぱたぱたと走り出した。

「タツちゃん!!」

その声にタチバナはすぐに振り返り、ミユリの姿に気が付くと、真新しい学生服の腕を広げて彼も走り出した。

「ミユちゃん!!」

ミユリが飛び跳ねるようにしてタチバナに抱き付き、タチバナがそれを受け止める。他の学生たちやクラスメイトの視線も気にせず、幼馴染の二人は再会を喜び合っていた。

「一年ぶりだね、ミユちゃん……!!」

「嬉しい。来てくれたのね、タツちゃんも……!!」

「うん。ミユちゃんに会いたくて、この一年、必死になって勉強したんだ」

ミユリのクラスメイトたちはあっけにと取られて、その様子を見守っている。

普段人を寄せ付けず、感情を表に出すことのない特待生のミユリが、誰かと親しげに話しているだけでも驚きなのに、『魔女』と渾名される彼女がこんな無邪気な笑顔を見せたことなど、これまでの学園生活で一度も無かったからだった。

「これからまた、一緒だね」

そう言って微笑むタチバナの手を握りながら、ミユリは言葉が続かずに立ち尽くす。

一年の間に溜まっていた感情が爆発して、笑顔だけでは足りず、ミユリの目には涙が滲んで

いる。

「じゃあ、また授業の後で。話したいことが、たくさんあるんだ」

タチバナはそう言うと、他の一回生たちに混じって教室の中へと消えていく。

ミユリはその場にずっと立ち尽くし、涙が乾くのを待ってから、遅れていそいそと魔術言語Bの教室へと入って行った。

その日の夕刻。

食堂の前にある中庭のベンチで、ミユリとタチバナは積もる話を打ち明け合っていた。

幼い頃から片時も離れず共に育ってきた二人が、一年間離れていたのである。子供時代を共有し、そして今思春期に差し掛かりつつある二人にとって、それは長過ぎる時間だった。

夕暮れのベンチに隣り合って腰掛け、互いの顔を見つめる視線が、けれども以前とは少しだけ違っていることに、ミユリとタチバナは気付かないふりをしつつも、心のどこかで意識して

しまう。

だからこそ二人は、本当はもつと他に伝えたいことがあるのに、それを避けるようにしてたわいもない話題に終始した。

「へえ、じゃあタツちゃんは、白魔法の専攻なのね？」

「うん、そうなんだ。白魔法は筆記試験重視だから、実技の下手な僕でもやれるんじゃないかって思つて……でもあんまり必死に勉強したもんだから、目を悪くしちゃつて、この通りさ」

タチバナはおどけて、鼻の上にある分厚い丸眼鏡を指でひょいと上げてみせる。

「ふふ、でも眼鏡も結構似合うわよ、タツちゃん？」

ミユリは面白そうに、タチバナの顔に手を伸ばして、そこにかけられた眼鏡に触れようとす。驚いたタチバナが慌てた様子で逃げるように体を反らすと、不意に手が触れ合つて、二人の間に一瞬、気まずい沈黙が訪れる。

こんなことは、今までに無かつたことだ。

経験したことのない感情に、ミユリもタチバナも戸惑っている。

無理もないことだった。

この一年の間にも、ミユリの胸は膨らみ、そしてタチバナの顔には、以前にはなかった髭がうつすらと生えている。

そのお互いの身体の変化を、見まいとしても、どうしても二人は意識してしまう。

けれども、たとえ身体の上でこれまでに無い変化があつたとしても、気持ちの上ではもともと二人の間には壁など存在しない。

小さな変化を乗り越えて、大事な気持ちを伝え合うために、それほど時間はかからなかった。

「ねえ聞いて、タツちゃん。みんな、私のことを『魔女』って呼ぶのよ。ひどいって思わない？」

「え、魔女？ どうしてそんなふうに？」

「魔術史の教科書に、魔女の肖像画が載っていたの。アリス・ミスフォーチュンっていう、五

百年前の魔女」

「アリス・ミスフォーチュンって、あの史上最悪の魔女と言われている……？」

さすがに勉強家のタチバナは、魔術史についてもすでに知識を持っていた。

「そう、罪の無い人々を何千人も殺したっていう魔女。その魔女の肖像画を見て、みんな、私にそっくりだって言うのよ。先生まで一緒になって笑い出して、私とっても恥ずかしかったんだから……」

「それで、みんながミュちゃんのことを『魔女』って呼ぶように……？」

「そうなの。ひどいでしょ？」

「確かにそれはひどいなあ。でも、そんなにミュちゃんに似てるなんて、ちょっと見てみたいな、その魔女の肖像画」

「じゃあ見てみる？ 私が魔女に似てるかどうか、タツちゃんが見て判断して？」

ミユリは鞆の中から魔術史の教科書を取り出すと、その半ば辺り、『魔女』の章の二ページ目にある『アリス・ミスフォーチュン』の項目を開いて、タチバナに手渡した。

そこには、おどろおどろしく装飾された枠線と、中世的な背景の中、逆巻く波のような長く黒い髪を持ち、大きく目を見開いた女性の絵が描かれている。

「うーん……言われてみれば、確かにこれはミユちゃんに似ているかもしれない……」

「ええ、タツちゃんまでそんなことを言うの？ 私はこんなに怖い顔はしてないわ？」

考え込んだ末、結論を出すようにつぶやいたタチバナに、ミユリは心外そうに頬をふくらませ、口をとがらせて反論する。

「私はこんなに吊り上がった目じゃないし、顔だつてもつと細いわよ？」

「そうなんだけど……どう言ったらいいのかな、ミユちゃんが本気で怒ったら、きつとこんな

感じなんじゃないかって気がするんだ……」

「やだ、タツちゃんが私のことそんなふうに思ってたなんて。今すぐ、ここで本気で怒ってみせてもいいのよ？」

仲の良い幼馴染までが魔女の肖像画を自分に似ていると言ったので、ミユリは腰に手を当て、怒った素振りをしてみせる。自然と目が吊り上がり、余計に肖像画に似てしまっていることに、本人は気付かない。

だがその吊り上がった目尻は、タチバナの次の一言で、すぐに元の位置に戻った。

「でもきれいだ、この女の人。ミユちゃんと同じくらい……」

「えっ……?」

タチバナの口から不意にこぼれ出た、予想もしていなかった言葉にミユリが戸惑う。

「ううん、ミユちゃんの方がもっともつと、何倍もきれいだ」

タチバナはそう言って、真剣な眼差しでミユリの顔を見つめる。

思いもかけないタチバナの態度にミユリはたじろいだ。

タチバナとはずっと仲の良い友達だったけれど、きれいだなって言われたことは、今までに一度も無い。

「タ、タツちゃん……」

戸惑い、たじろぎながらも、ミユリはその幼馴染の顔から視線を外すことが出来ない。タチバナはミユリのことをまっすぐに見つめている。

「ミユちゃん、僕、ずっと考えてたんだ。ミユちゃんと会えなくなつてから、僕がミユちゃんのことをどう思っていたのかを……だから僕は必死で勉強して、この魔法学部に来たんだ……僕はこれから、ミユちゃんの傍に、ずっとずっと居たいって思ってる……!」

タチバナの口から飛び出す言葉のひとつひとつが、ミユリの心にずしんと響き、ミユリは胸が締め付けられるような思いになる。

ミユリは何と言っているのかわからず、ここから逃げ出したいような衝動を覚える。だけど、自分のためにここまでしてくれた幼馴染の気持ちに答えなくてはいけない。

しばらくの沈黙の後、ミユリはやつとの思いで口を開くと、そこから自然に言葉がこぼれ落ちた。

「わ、私……気付いたの。ここへ来てから……今まで、タツちゃんがいつも隣に居てくれたから、私は頑張れたんだ、つて。タツちゃんが存在が、私にとって、すごく大きいんだつてことに……タツちゃんが居なくて、私、寂しかった……」

感情を表現することが苦手なミユリにとって、それは精一杯の真実の告白だった。

隣同士に座ったベンチの上、タチバナの手がミユリの手の上に重なる。ミユリは一瞬、どきりとしたが、もう気まずい思いになつたり、慌ててその手をどかす必要はなかった。

見つめ合う二人の顔が自然に近づき、二人の唇がそつと触れ合った。

ほんの数秒、互いを慈しむような優しいキスが終わると、二人の顔が離れる。

見つめ合ったまま、どちらからともなく微笑み、二人はこれまでに無かつたような幸せな気持ちに包まれる。

見つめ合うその視線の中には、もうこれまでとは違う、確信に満ちた新たな絆が生まれていた。

青春の始まり。

それは、これまで幼馴染ではあっても、仲の良い友達にしか過ぎなかったミユリとタチバナが、「恋人同士」へと踏み出した瞬間だった。

こうして孤独だったミユリの学園生活は、一転して幸せなものとなった。

相変わらず他人に対して感情を見せることは少ないものの、昼休みや授業後の時間はタチバナと共に過ごし、二人が食堂で一緒にランチを食べている姿や、中庭を共に歩いている姿は学園の中でもおなじみの光景となっていた。

あまりにもいつも一緒に居るので、ミユリは『魔女』に引き続き、苗字のオクヤマに引っ掛けて『オクサマ』という渾名を頂戴することになった。

それはもちろん、いつも一緒に居るタチバナの奥様、という意味であって、ミユリはそれが少し恥ずかしかったが、内心、決して嫌では無かった。ミユリは自分にタチバナのようなかけ

がえのない相手がいることが、却って誇らしかったのだ。少なくとも『魔女』と呼ばれるよりは、それは何倍も良かった。

以前よりも親しみやすい渾名で呼ばれるようになったからか、少しずつミユリにも友人が出来るようになった。

それは決して、普通の女子生徒のように常につるんでおしゃべりするような友人関係ではなかったけれど、クラスの中で数人の女子が、時折ミユリに話しかけてくれるようになったのだ。それまでは孤独に魔法の修行に向き合い、常に厳しい表情をして人を寄せ付けなかったミユリが、タチバナの存在によって気持ちに余裕が出来て、表情も穏やかになったことがその理由だったが、もちろんミユリ本人にその自覚は無い。

けれども、こうしてまたタチバナと一緒に過ごすようになって、タチバナという存在を自分の傍に取り戻してから、辛かった学園生活は楽しいものとなり、周囲の生徒たちも自分とタチバナの関係を歓迎してくれている。

悪夢を見ることもなくなり、すべてが上手く行っている、とミユリは思った。

だが、そんなミユリの変化を喜ばない人物が一人だけ居た。

ミユリの黒魔法の師匠であるクジマ老子、その人だった。

黒魔法の使い手は大抵の場合、性格がねじ曲がっている、と言われる。

それは攻撃を主とする黒魔法の性質上、避けられない事である。

魔法の力は各人の心の形の現れである。

そのため、黒魔法に適性を持つ者とはすなわち攻撃的な性格を持った者であり、またその内に秘めた攻撃性が大きければ大きいほど魔法の威力も増す。

そして黒魔法に精通すればするほど、さらに本人の性格もその影響を受けていく。

そのため魔力の強い黒魔法師ほど、攻撃的で冷酷な性格を持つことになる。

だがもちろん、そのような攻撃性をむき出しにしては、社会の中で平和な生活は営めない。

その結果、黒魔法の使い手は自らを抑えつつ生活を送る中で、自然と社会に対して斜に構えた態度を取るようになり、大なり小なり性格がねじ曲がっていくのである。

一步間違えば、社会に対して破壊と殺戮をもたらしかねない、暗黒面に陥る危険性を孕んだ技能。それが黒魔術の本質であり、クジマ老子はまさにそのぎりぎりの線上を歩んでいる人物だった。

魔法とは選ばれた者だけが使いこなすことの出来る技術である。

学問と研究によつてその理論を学ぶことは誰にでも出来るが、実際にそれを行使するには才能が必要だ。

そしてその才能を持つ者は稀だった。

幼い頃から不思議な力の片鱗を度々にわたつて見せ、中等課程の初級魔術の授業の折に、蠟燭に火をつける試験において、危うく校舎を焼き尽くすほどの巨大な炎を発現させたミユリが、魔術師協会のスカウトを受けることになったのは、その稀なる才能を持つ者であると認められたからだ。

十三歳の誕生日を迎えると、ミユリはすぐに王立学園魔法学部特別入学することとなり、何から何まで特別扱いの中、ミユリはその内に秘めた攻撃性により、黒魔術への適性ありと判

断された。

そしてミユリが魔法学部教授たちの前に連れて来られた時、奥の席に座っていたクジマ老子はミユリを一目見るなり立ち上がり、「この娘は儂が教える」と言っただった。

クジマ老子、その本名はクジマ・ゾリユウジ。

彼はまだ若き頃、都を襲ったデーモンを倒して国王から勲章を授与された英雄であり、並ぶ者の無い大魔法使いである。

冒険者として戦いの場から退いた後、このサトの町の王立学園にて黒魔術の教授として教鞭を取っている。

だが、彼も偉大な魔術師の例に漏れずその性格は大いにねじ曲がっており、その扱いには学園側も頭を悩ませていた。

この伝統ある魔法学部の教授陣の中にあっても、理論においても実践においても、また純粋な魔力の面においても、クジマに太刀打ちできる者はいない。

だが彼の指導方針はあまりにも極端であり、時には常軌を逸していた。生徒の中には指導を受ける中で重傷を負ったり、精神的に再起不能となる者も居て、ほとんどの学生はクジマの指導に着いて行けなかった。

そんなクジマは批判の対象となり、他の教授からも陰口を叩かれ、学園内で次第に孤立して行つた。

だが、現実には魔術で敵う者がいない以上、表立つて彼に意見出来る者はおらず、学園側としても彼をクビにする事は出来なかった。

今ではクジマは扱いづらい客員教授として、数少ない授業を担当しつつ、宛てがわれた黒魔術館の研究室で、半ば隠居の身となつて、誰も読むことのない論文を書き続けている。

そのような、誰もがもう隠居したものと思つていた窓際の老教授が、突如立ち上がつて、この女生徒の指導を自ら買つて出たのである。他の教授たちは、誰もが戸惑いを隠せなかった。

「娘、お前の名はなんと言う」

部屋の奥に座っていたクジマは立ち上がり、前に進み出ると、初々しい制服姿のミユリに向

かつてそう問いかけた。

「ミユリ……ミユリ・オクヤマといいます」

「そうか。儂はクジマ・ゾリユウジ。これでも若い頃には大魔法使いと呼ばれていた身だ。ミユリよ、お前には儂が持てる黒魔術の全てを教え込むつもりだ。それで、いいかな……？」

すでに齢六十に達しているその老魔術師は、最後に少しだけ優しい口調になって、そう問いかけた。

十三歳の娘に過ぎないミユリには、教授たちの関係や、彼らの過去、そして大人の事情は関係ない。この部屋の中で一番強い魔力を持ったこの老魔術師が、自分の先生になってくれるのだという事を、素直に喜んだ。ミユリの方も、最初の一目で教授たちの魔力を見抜いていたのである。

「はい。よろしくお願いします」

「ふむ。良い返事だ。いいか、儂に答える時は、余計な事は言わんでいい。はい、か、いいえ、か、それだけだ。そのどちらも答えたくない時は、黙つとればいい……」

こうしてミユリはクジマ老子の特別指導を受けることとなり、一般の魔術課程の授業を受けつつも、クジマの個人指導による特別カリキュラムが組まれることとなった。

将来有望な特待生の指導を、クジマが独占的に行うことには批判もあったが、最も才能のある生徒の指導を、最も魔力が強く、戦場での実績も持つクジマが行うのだから否定は出来なかった。

そもそも魔法使いの教育は、伝統的に師匠と弟子との間で一対一で行われるのが本来の姿である。

こうして、ミユリは偉大な師匠の下で、本格的な魔術への道を歩み出したのだった。

その師匠の下で厳しい修行に明け暮れ、孤独に向き合いながら生活した一年。

だがそんな生活もタチバナの入学によって明るくものへと変わり、二回生となったミユリが、師匠であるクジマから警告を受けたのは、タチバナとの再会から三ヶ月ほどが経った頃だった。その時ミユリは、黒魔術館の修練場で、一秒間に八つの火の玉を、二十メートルほど先にあつてに向けて放つという訓練を行っていた。

先週までは連続してスムーズに放つことが難しかった火の玉を、今日はきれいな等間隔を空けて放ち、しかもそのすべてが的に命中している。うまくやれた、ミユリは心の中でそう思った。

しかし、師匠のクジマからは意外な言葉が飛んできた。

「駄目だ。先週よりも威力が落ちておる……！」

思いもかけない言葉にミユリは驚いた顔で師匠の方を振り向く。

「的には当たったかもしれん。だがあれでは、敵は倒せん」

ミユリは一瞬、反論したくなかったが、師匠の言うことは絶対だ。納得できない様子のミユリに、クジマはさらに言い放つ。

「ミユリよ、黒魔術とは曲芸では無いのだぞ。戦いの中で役に立たぬ魔術は、魔術ではない」

クジマの言葉は真実だった。

黒魔術とは攻撃と破壊を旨とする魔法であり、その効果は実戦の中にあつて初めて意味を持つ。

魔術とは実践である。その理論を知り、学ぶことは誰にでも出来るが、それは文字通り机上の空論であつて、実際の魔術の行使はむしろスポーツに近い。呪文の詠唱からそれを放つ動作に至るまで、集中力、判断力、反射神経等、優れた適性を持つ者だけが効力のある魔法を放つことが出来る。

そこには文字にして伝える理論以上に、美しさ、機敏さ、そして正確さが求められる。

だがクジマの教える実戦の魔術とはそれ以上のものだ。

黒魔術とは戦場の魔術。

なればこそ、クジマはそこに美しさや正確さだけでなく、実戦を勝ち抜くパワー、相手を欺

く狡猾さ、そして勝利をもぎとるための気迫や執念。そういったものまでを教えようとしていた。

それらはスポーツよりもさらに武術に近く、その本質は理論書や公式のようなものによって教えられるものではない。

だからこそクジマの指導は、時に傍から見ても理解できぬほどの厳しく、過酷なものとなるのだった。

師匠の言葉の意図を理解したミユリは、その場にうなだれる。

確かに今放った魔法には、己の魔力の十分の一の力も乗せていなかったかもしれない。

「ミユリ、このところのお前の魔法には、攻撃性が欠けておる。以前はあれほど鋭かった魔力の刃が、日に日に鈍ってきておる……」

修練場の射撃位置まで歩み寄ってきたクジマは、うなだれるミユリの肩に片手を置くと、言い聞かせるようにこう言った。

「話は聞いておるのだぞ……いつ言おうかと迷っておった。一回生の、あのタチバナという男

と付き合っておるのだろう……その男とは別れるが良い。お前の魔術のためにならん」

師匠の言葉に驚いたミユリが、びくつとして顔を上げる。

「お前がどんな男に好意を寄せようと、それは構わん。だが、そのような甘い感情は、黒魔術の道を極めようとする者には邪魔なものだ……」

ミユリは肩に置かれた師匠の手を払いのけると、きつとした表情でクジマを睨みつけた。

その彼女の態度に驚いたのは他ならぬミユリ自身だ。これまでに師匠に対して反抗的な態度を取ったことは一度も無かった。

「先生、私とタツちゃんは、そんなじやありません」

師匠であるクジマの顔を睨みつけたまま、ミユリが口を開く。感情的になり、自分でも知らないうちに言葉が溢れ出た。

「タツちゃんと私は、小さな頃から一緒に育ったんです。タツちゃんの居ない私は、私じやあ

りません。彼と会えないくらいなら、私は魔法を辞めます……！」

ミユリは師匠の顔から少しも視線を逸らさず、そう言い切った。

食ってかからんばかりの弟子の態度に、クジマは一瞬、たじろいだが、次の瞬間には打って変わって笑い出した。

「ふははは……たかだか十四の小娘が、大魔法使いと言われるこの儼に正面から食ってかかるか……」

クジマは面白くて仕方が無いといった様子で笑い続けていたが、突然、なにかを諦めたような寂しそうな表情になり、低い声でこう言った。

「よかろう。ではその言葉が正しいかどうか、お前自身の身で証明してみせるがいい……」

ミユリはその時のクジマの表情を、後々に至るまで忘れられなかった。

この偏屈で厳しい師匠が、そのような寂しげな顔を見せたのは、この時が初めてだったからだ。

「はい」

ミユリはそれだけ答え、今度は先程の倍の魔力を込めて、炎の連弾を打ち出した。そして新たな闘志に火のついたミユリの魔法は、この時から再び、威力を増していった。

月日は流れ、進級したミユリは魔法学部のカリキュラムの中でも上級生となっていた。

ミユリは師匠のクジマから与えられた課題を順調にこなし、高位魔法と言われる術式も使いこなせるようになっていた。

またタチバナも白魔法の研究に打ち込み、理論や学術の面で優秀な成績を収めると共に、治療や回復の分野において実践にも取り組み始めた。

この国では白魔法と医療は密接に結びついている。もともと優しい性格を持ったタチバナは、実践において攻撃魔法は一切使えないものの、人の命を救うための魔法や医療の分野に興味を

持ち、治癒魔法のスペシャリストとしての道を歩み始めていた。

ミユリとタチバナは恋人同士として付き合いながら、それぞれの分野での修行に打ち込み、互いに励まし、刺激し合いながら充実した日々を送っていた。

もちろんまだ学園生である二人は学内の寄宿舎で生活する身であり、そのデートの時間は限られていたが、夕刻に中庭のベンチで語り合う二人の姿はもはや学園の風物詩となり、またランチタイムの食堂では、一番奥のテーブルが二人の指定席として学生たちの間に知れ渡っていた。

また閉館後の図書館の前で、人気のない夕闇の中、キスを交わす二人の姿をうっかり目撃してしまった学生も一人や二人では無かった。

黒魔術の特待生であるミユリと、白魔術の分野でトップの成績を収めているタチバナ。そんな二人が交際していることを、ほとんどの学生は好ましく思い、羨望と共にあたたかな目で見守っている。

だが、ミユリが学部の上級生となったその年、二人の学園生活は小さな波乱に見舞われた。

ミユリは特待生として、これまで他の学生たちとは違う特別なカリキュラムの下で修行と学業を続けてきたわけだが、学部生としての最後の年であるこの年には、他学部の学生に混じって一般教養の授業をいくつか受けることになっていた。

自然とタチバナもミユリと同じ授業を選んで履修し、魔法学部の校舎からは少し離れたところにある教養学部の大教室まで、二人一緒になって通っていたのだが、ある日、その教室の前を歩いていた時に、一人の男子学生がミユリに声をかけた。

「ねえねえ君、可愛いね。前から気になってたんだ。どこの学部？ 名前なんて言うの？」

その学生は気安い態度でミユリにそう言つて声をかけると、スカートの上からミユリのお尻をぽん、と叩いた。

事情を知っている何人かの魔法学部の学生がざわついた声を出した。

その男子学生はたまたま少し前を歩いていたタチバナに気付かなかつたのだ。また、気付いたとしても、それが彼氏だとは思わなかつただろう。

「えっ……？」

驚いたミユリは戸惑って振り向いたが、どうしていいかわからず、口をぽかんと開けたまま、声をかけた男子学生の顔を見つめている。

視線の先には背の高い、顔立ちの整った男が立っている。剣術でもやっているのか、胸や肩の筋肉が盛り上がっていて、同じ学生服を着ていても魔法学部男子生徒とは随分印象が違う。馴れ馴れしい態度で笑う彼の口には、歯並びのいい白い歯が輝いていた。

周囲の学生たちが一瞬ざわついたので、その場は時間が止まったようになり、皆の目がミユリと男子学生に注がれる。

気付いたタチバナも振り向くが、何が起きたのか飲み込めず、ミユリ同様、何も言えずに成り行きを見守っている。

ここで勘の良い男や、血の気の多い男であれば、恋人の身に起きたことを察して相手につかみかかるところだが、タチバナはこういうことには鈍かったし、また考える前に手が出るようなタイプでも無かった。

凍り付いてしまったその場の状況を見て、事情を知っている他学部の学生が、声をかけた背の高い男子学生に耳打ちする。

「え、何？ 彼氏いるの、あの子……？」

男子学生は話を聞いて事情を知ると、

「ちえつ、じゃあしょうがないなあ……残念だな、すつげえ可愛い子だと思ったのに……」
そう言つて踵を返して引き下がり、その場はそれで収まつた。

静かになつていた廊下には再び学園生たちのおしやべりが響き、皆が何事も無かつたかのよう
うに教室へ入っていく。

だがミユリはしばらくの間、そこから動けなかつた。
知らない間に、心臓の鼓動が速くなっている。

（お尻……触られちゃつた……）

ミユリは、その時にタチバナが自分の前を歩いていて、その瞬間を彼に見られなかつたこと
に、少しだけ安堵していた。

女友達とはおせっかいなもので、知らなくてもいい情報を、頼んでもいないのに次々と運んでくる。

（リュウト……リュウト君っていうんだ、あの人……）

おせっかい焼きのクラスメイトたちのせいで、三日もしないうちに、ミユリはあの時、自分に声をかけた男子学生の名前だけでなく、どこの学部で、どんな人物なのかも知ってしまったていた。

伝統と格式のある王立学園とはいえ、そこで学んでいるのは大部分がまだ十代の学生たちだ。『騎士学部で一番の遊び人が、魔法学部の特待生に手を出した』という噂は、あつという間に学園内に広まり、当の本人が大して気にしていないにも関わらず、周囲の学生たちは過剰なくらいに盛り上がっていた。

その男子学生の名はリュウト・キルエンといい、噂の通り騎士学部の学生である。

ミユリと同じ上級学年だが、ミユリは特待生として二年早く入学しているため、年齢はミユリよりもふたつ上ということになる。

家柄も良く地位や資産も持った身分の出であり、ルックスにも恵まれていることから、女子生徒たちの間では人気だが、そのぶん浮気性で、女癖が悪いと評判の男だった。

魔法学部は、学園の中では歴史学部や神学部と隣り合った場所にあり、騎士学部、戦術学部といった軍事系の学部は施設の関係上離れた場所にある。それぞれに寄宿舎も違えば、学園生たちが昼食に使う食堂も別だった。

だからこそ騎士学部のリユウトは、魔法学部の特待生であるミユリのことを知らず、またミユリとタチバナの関係も知らなかったわけだ。

ミユリたちの通う学術系の学部と、軍事系の学部では雰囲気も違えば、そこに通う学生たちのカラーも違うが、考えてみればミユリはこの年になって初めて、一般教養の授業を受けることになり、軍事系の学生たちを間近に目にしたのだった。

技術系の学生と、文科系の学生との間に仄かな反駁があるように、ここサトの王立学園に於

いても、学術系の学生たちと、軍事系の学生たちの間には目に見えぬ対抗意識があつた。それは頭脳派の学生と、肉体派の学生との間における宿命的な争いだったが、こと女子にモテる、という分野にあつては、どうしても肉体派の軍事系学部 of 学生に分があつた。それは軍や政治の中にあつて、将来的な地位も名誉も保証されているという上に、文字通り男としての肉体的な魅力に富んだ彼らは、女子を口説き落とす上で何倍ものアドバンテージがあつたからである。

現に、騎士学部の男子生徒が、他学部 of 女子生徒と付き合つてゐる光景は度々見かけるが、歴史学部 of 男子生徒の間にはそういった話は聞かない。名門と言われる魔法学部の学生であっても、事情は大して変わらない。

そんな事情があり、また双方 of 学生がお互いに目に見えぬコンプレックスを相手に対して抱いているからこそ、騎士学部一 of 遊び人であるリュウトが、魔法学部 of 特待生であり、誰もが憧れる美少女であり、また『オクサマ』と渾名されるほどに仲の良い彼氏がいる、そんなミユリにちよつかいを出したこの事件は、学術系対軍事系のまさに象徴的な出来事として、学園生たちの噂の的となつたのだつた。

だがミユリとタチバナは、周囲の噂などこ吹く風といった態度で、普段どおりの学園生活を続けていた。

もちろん二人とも、噂がまったく気にならないわけではない。だけれども昔から仲の良かった二人は、周囲からからかわれることにも慣れていた。まだ子供だった初級学校の頃から、互いに片時も離れようとしないう『仲の良過ぎる』二人は、周囲の子供たちだけでなく、大人たちからも奇異の目で見られ、からかわれたり、冷やかされたりしてきたのだ。

こういう噂は、時が経てば自然と消える。

その事を知っている二人は、今まで通りに夕刻のベンチで語り合い、食堂の奥のテーブルでランチを一緒に食べて、そして週に一度、共に図書館で勉強した後には秘密のキスをした。そこには、他人の付け入る隙間など、少しも無いように思われた。

事件から一週間後、騎士学部で一番のモテ男と言われるリュウト・キルエンは、三人の取り巻きを引き連れて、食堂でランチを食べていた。

食堂と言ってもいつもの場所ではなく、彼はわざわざ、キャンパスの反対側にあるこの学術系学部の食堂までやってきたのである。

リュウトたちが座っているのは、食堂の入口近くのテーブル。その視線の先には、一番奥のテーブルに座って仲良く昼食を取っているミユリとタチバナが居る。

「おい、ミユリ・オクヤマが処女だっていうのは間違いないんだろうな？」

本日のメニューであるイースタン・フライド・ヌードルを口に運びつつ、リュウトは取り巻きの一人であるカナグリに向かって問いかけた。

「ああ、間違いないよ、リュウト。あの子は特待生として皆とは違う授業を受けていて、教授陣からも目をかけられている。そんな立場のあの子に近づいた男はいねえ。付き合ってるっていう男は幼馴染だそうだ」

カナグリは大きな声でそう答える。

昼食を食べる学生たちで混雑する食堂の中、彼らは他人の目も気にせず、我が物顔でテーブルを占領して会話をしている。その様子は皆の注目を引き、明日になればこれらの話は『騎士

学部のもて男、魔法学部のオクサマを狙って作戦会議』という噂となつて学園生たちの間に広まつているだろう。

「その幼馴染とヤツてないって何で言えるんだ？ 付き合つてたら、普通エッチするだろう？」

横から疑問を投げかけたのは取り巻きの一人であるサカヤマだ。

「その男は真面目クンなんだよ。覚えてるか？ いくつかの始業式の時、代表でスピーチしたあの眼鏡だよ。毎週金曜日に図書館で一緒にお勉強した後、チューして門限通りに寄宿舎に戻つてるらしい」

「要するに、キスまでしかしてないってことでつね」

おどけたように言葉を挟んだのは取り巻きの中でも一番下っ端のススムである。

「プラトニックな交際つてやつか。なんで学術系のやつらは、そういうのを信じられるんだろ。うな。女なんて、ヤツてナンボだろうによ？」

リユウトは不思議そうに疑問の声を出す。

騎士学部のもて男として、数々の女生徒に手を出してきた彼にとっては、付き合っておいてエッチしない、というのは理解の範疇を越えているのだ。

「で、あの隣に座ってるのが、その真面目クンってわけだな……？」

リユウトは改めて、食堂の一番奥のテーブルに視線をやり、そこでミュリと一緒に談笑しながらランチをつついている男を遠目にしげしげと眺めた。

「そうだ。あいつの名前はタチバナ・クラウチ。専攻は白魔法。特別枠で皆より一年早く入学し、その後も成績はトップクラスを維持している。性格は品行方正そのもので、周囲の生徒や教授陣からの評判もいい」

再びカナグリが答える。彼はこの一週間の間に、二人に関する情報を収集し終えていた。

「絵に描いたような優等生ってわけか……だが納得できねえな。俺にはあの男が、ミュリちゃんとの彼氏だとは、どうしても思えねえ」

「俺もそう思うぜ。納得がいかねえ。白魔法だか特別枠だか知らねえけど、なんであんな暗そうな、眼鏡をかけたひ弱な男が、ミユリちゃんみたいないい女の彼氏なんだ？」

リュウトの問いかけに、サカヤマも同意する。それは騎士学部で普段から男を磨いている彼らにとつては、当然の疑問と言えた。

「バランスが全然取れてねえぜ。あんな可愛い子と付き合うのは、もっと強くてたくましくて顔もいい、そんな男じゃなきゃ釣り合いが取れねえはずだ。あいつは単に幼馴染だからって理由で、成り行きで一緒に居るだけなんじゃねえのか？」

「お前の言う通りだな、リュウト。幼馴染、優等生。そんな理由であの二人が付き合ってることに、魔法学部や学術系のやつらは納得してるかもしれない。だが俺たちはそうじゃない。あの二人は明らかにアンバランスだ」

「そのアンバランスにつけ込んで、あの二人を引き離しちゃうというわけだつね」

カナグリが答え、ススムは横目で奥のテーブルの方を見つつ、ククク、と笑う。

「よっしゃ。たとえ彼氏がいようとも関係ねえ。あの女は俺がもらう。ミユリちゃんの処女は、この俺がいただくぜ！」

そう言って、決意を固めたように拳を握りしめるポーズを取ったりユウトに、カナグリは違う話題を振った。

「ところでリュウト、お前、先月から付き合ってるあの女のことはいいか？ 商学部の、なんつつたつけ？」

「ああ、エリカのことか？ あの女はもういいんだよ。あの程度の女、三度も抱けばもう飽きちまうぜ」

「けっ、これだから名家の坊ちゃんはいいいな。お前が寄宿舎の応接室をラブホ代わりにしてること、職員たちは黙認なんだろう？」

「また俺たちにも分け前に与らせてくれよ、リュウト」

「へへ、しょうがねえな。俺は自分にふさわしい理想の女を探して、いつだって旅の途中なんだよ。だが俺はついにこれだっていう子を見つけたんだ。ミュリちゃんっていう美少女をな……エリカのことなんてもうどうだっていい。あんな女、お前らにくれてやるぜ……明日の夜、応接室に來い」

「やった、また皆でやり捨てだく!!」

取り巻きの三人が歓声を上げる。

その下品な騒ぎに、周囲の学園生たちは振り返り、白い目で見つめているが、この食堂で明らかに異質な騎士学部の人々に声をかけようとする者はいない。

食堂の奥でいつも通り仲良くランチを食べているミュリとタチバナは、その騒ぎ声に気付いていなかった。

十三歳という若さで特待生として入学して以来、このサトの王立学園で年月を過ごす中で、ミユリは自分がいつの間にか成長し、どれだけいい女になっていたのか、少しも気付いていなかった。

特にこの一年の間に、胸だけでなく、ミユリはお尻が随分大きくなった。

腰回りが女性らしく丸く膨らんで、その上のウエストはきゅつと締まっている。

その細いウエストにスカートのホックを留め、紺色のスカートはミユリのお尻を覆い隠そうとするが、成長したそのお尻の曲線はスカートの紺色の布地の上からでもはっきりとわかるほどに、柔らかな丸みを帯びた形と、その真ん中にある割れ目の谷間を誇示している。

そして成長を続ける胸は、昨年まで着けていたCカップのブラジャーでは収まらなくなり、ミユリは購買部で新しいブラジャーを買い求めなければならなかった。

ミユリはどちらかといえばこの自分の身体の成長が疎ましかった。時に激しい武術のような動きを求められる黒魔法の修練に、大きな胸や重いお尻は邪魔なものでしかない。

ミユリの頭の中には今、ふたつの事しかない。

ひとつは全力で修行に取り組んでいる黒魔法であり、もうひとつは友人であり恋人でもあるタチバナのことだ。

そんなミユリにとって、成長を続ける自分の女の身体は、まるで自分の意志とは関係なく、無理矢理に押し付けられた異質な荷物のように思われた。

（でも、胸が大きくなったら、ひよつとしてタツちゃんは喜んでくれるのかな……？）

タチバナと幼馴染として兄妹のように育ったミユリは、彼のことを異性として意識するといふ考えは薄い。

もちろん恋人となった今では意識しているが、男と女の肉体関係という方向には、どうしても考えが進んでいかない。

ミユリはタチバナの傍にすることが嬉しいのであって、それ以上のことはどうでもいいのだ。少なくとも、今は……

だがそんなミユリの天然とも言える無頓着と、男女関係への意識の薄さが、当のタチバナを

悩ませていることに、ミユリは気付いていない。

ミユリと一緒に過ごす時、タチバナの視線はどうしても、ミユリの日日に大きくなっている胸や、丸いお尻のラインを、ちらちらと眺めてしまう。

どれだけ一緒に語らい、時間を過ごしていても、彼らはまだ学園生であり、寄宿舎で生活する身だ。それ以上の関係は、今は望めない。

ましてやタチバナは真面目な性格である。

自らが打ち込んでいる白魔法の研究と、その実践。

今はそれが彼にとつての最重要課題であつて、ミユリとの関係を深めることは、今はまだ考えられなかった。

だがわかつてはいても、青春のまつただ中にいるタチバナの肉体は、愛しい恋人に惹かれてしまう。

週に一度だけ、閉館後の図書館の陰でキスを交わす時、タチバナはミユリの肩をそつと抱き寄せるが、本当はもつと強く抱き締めてミユリの背中を撫で回したいのだ。そしてその手を下に伸ばしていつ、丸く柔らかなミユリのお尻を手のひらで触ってみたい……

タチバナはその衝動を、いつも必死の思いで抑えていた。

もしミユリのお尻に手が触れてしまったら、その後、自分を抑えられなくなって、彼女との関係がどうなってしまうのか、タチバナは怖かった。

けれどもいくら自分を抑えても、あたたかな陽射しの中、隣に座るミユリの胸元、制服の白いブラウスの隙間からちらちらと覗くブラジャーの線と胸のふくらみは、眩し過ぎるほどにタチバナの心を揺る。

そしてミユリがタチバナの前を歩く時、彼はいつの間にか大きくなっていったミユリのお尻の色っぽい曲線を見つめ、楽しかった子供時代は過ぎ去り、ミユリが大人の女になりつつあることを実感する。

学園生活を送る中、そんなミユリのお尻に見とれている者が、自分一人だけではないことに、タチバナもすでに気が付いていた。

誰もが見とれ、誰もが振り返ってしまうようないい女。

自分の大事な幼馴染であるミユリが、そんな美女へと成長を遂げつつあるのを、タチバナは

今、少しずつ感じていたのだった。

誰かが私のことを見ている……

そう感じるのは、初めてのことではない。

特にこの一年というもの、ミユリは男子生徒の視線を感じることが多くなった。

魔術課程の授業中にも、ランチから教室に戻る時も、そして、タチバナと一緒に歩いている時でさえも。

振り向くと、誰かが自分のことを見ている。でもその誰かは、ミユリが気付くと照れたように視線を逸らし、何事もなかったように通り過ぎて行く。

彼らはみんな、何を考えているのだろう……

ミユリは次第に面倒臭くなり、学園生活を過ごしながら、それらの視線を気にしないようになつていった。

だからこの日、自分の背中に視線を感じた時も、ミユリは特に何も気にせず、隣にいるタチバナと会話を続けていた。

一般教養の授業を受講するため、教養学部の大教室へ向かう途中のことである。

「よお、ミユリちゃん……！ ミユリ・オクヤマっていうんだろ？ 魔法学部の特待生」

後ろで声がして、振り向くと、あの男が立っていた。

二週間ほど前に、自分に馴れ馴れしく声をかけ、お尻に触れたあの男。

確か、リュウトという名の、騎士学部の学生。

「俺、リュウト・キルエンっていうんだ。もう噂は聞いてるだろ？ 俺、君に惚れちゃったんだよ。彼氏が居ても構わないからさ、ちよつと俺の話、聞いてくれないかな？」

リュウトはそう言うのと、ミユリに歩み寄り、抱きかかえるようにしてその背中に手を回した。周囲の学生たちがざわめく。

リュウトがミユリを狙っていることは既に学園中に知れていたが、隣に彼氏であるタチバナが居るにも関わらず、こんな大胆な行動を取るなんて、誰も予想出来なかったことだ。

「ち、ちよつと、君……！」

タチバナは慌てて声をかけたが、その後が続かない。

突然のことであつたし、あまりにも当然のようにミユリの腰に手を回し、彼女の顔を覗き込んでゐるリュウトの態度に、タチバナは驚きを通り越してあつけに取られているのだつた。

あつけに取られたのはタチバナだけではない。周囲に居た学園生たちも、そして声をかけられたミユリ本人も、何が起きたのかわからないといった様子で硬直し、まるで時間が止まつてしまつたようだ。

リュウトは自分に自信があつてこの行動を取つてゐる。

ひ弱な根暗男であるタチバナには、たとえ目の前でこんな行動を取つても、自分に楯突く度胸は無いと高を括つてゐる。

そしてミユリには、腰に手を当て、抱きかかえる姿勢になることで、自分のたくましい肉体をアピールし、男と女の間係を意識させる。

そして我が物顔の行動を敢えて取ること、タチバナだけでなく周囲のすべての学生たちに對して、今から俺がこの女に手を出すことに、文句は言わせないという無言のメッセージを投げかけてゐる。

言葉よりも先に身体にものを言わせる。

騎士学部肉体派らしいリュウトの行動だった。

「そんな男と付き合っていないでさ、俺とデートしてくれないかな。いつペンだけでいいからさ？」

リュウトはミユリの顔を覗き込み、にこやかにそう告げる。

リュウトは背が高いので上から見下ろされる形になり、片手が腰に回されているだけでも、ミユリはそのたくましい腕で包み込まれてしまったような錯覚に陥る。

ミユリは何と答えていいのかわからず、目と口をぽっかりと開いたまま、自分に言い寄る男の顔を見つめている。

タチバナも手を伸ばして、何かを言おうとしたが、皆の視線が集まり、まるで時間が止まったかのような緊迫感の中で、喉の奥からは声が出てこなかった。

「もったいないよ。幼馴染か何か知らないけど、いつまでもあんな冴えない男というなんてさ……君、こんなに可愛いんだから……!!」

そう言つてリュウトの手は、ミユリの背中をさすり、そしてその手のひらはスカートの方へと降りてきて、ミユリのお尻の丸い曲線を、スカートの上から何度か撫で回した。

「……!!」

その場に居合わせた男子生徒たちの間に衝撃が走る。

タチバナはリュウトの大きな手が、ミユリのスカートの上を這い回る光景をはつきりと見てしまった。

「あ……!」

ミユリが不意に口を開き、どことなく場違いな声を出した。

皆の視線が、ミユリに注がれる。

タチバナの見ている前でこんなことをされて、ミユリがどう答えるのか、誰もが注目している。

「なあに、ミユリちゃん……？」

リュウトは得意気に、満面の笑顔になってミユリの顔を見つめる。

「あ、あなた……」

ミユリの顔が下を向く。その表情は、恥ずかしがっているように見える。けれども、次にミユリが顔を上げた時、その表情は一変していた。

「あなた、失礼な男ね……！」

ミユリは冷たい顔でそう言い放つと、右手を顔の前にすつと差し出した。

伸ばした人差し指の先に、数センチほどの炎が、ぽつという音と共に出現する。

次の瞬間、その炎の球はリュウトに向かって飛んでいき、あろうことか彼の制服の股間のあたりに着弾した。

またたく間に、リュウトの制服のズボンは火に包まれる。

「あちっ！ うわっ！ なんだよ！ 何すんだ、この女！」

辺りは大騒ぎだ。周囲の学生たちは自分の上着を脱いで、火に包まれたリュウトにかぶせ、消火しようと慌てている。

水を、という声が響き、数名の学生がバケツを持って走っていく。

女子生徒たちは悲鳴を上げて、騒ぎを遠巻きに見守っている。

だがミユリはそんな周囲の騒ぎを気にもかけず、ただ一人、平然とした様子で教室へと入っていた。

「ミ、ミユちゃん、やり過ぎだよ……学内で攻撃魔法を使うことは、禁止されているのに……！」

タチバナは慌ててミユリの後を追い、心配になって諭すように声をかける。

「あら、あんなのは攻撃魔法のうちには入らないわ。ちよつと温めてあげただけよ……」

言葉とは裏腹に、ミユリの表情は相手を見下すように冷たい。

ミユリのそんな表情を見るのは、タチバナでさえも初めてだった。

『騎士学部のアレイボーイ、魔女の前に敗れ去る』

事件はあつという間に噂となつて学生たちの間に広まり、新聞部の発行する学園新聞の第三面に、記事となつて大きく掲載された。ご丁寧にも現場の様子を再現したイラストまでが付いている。そのイラストには、クールにその場を立ち去るミユリと、股間に火が着いて大慌てで悲鳴を上げるリュウトの姿が、面白おかしく描かれていた。

一夜にしてリュウトは学園中の笑ひ者となり、関係のあつた女子生徒たちからも軒並みフラれてしまった。しかしあつけない決着を見せた事件のことを、学園生たちは一週間もするとすっかり忘れて、普段通りの学園生活へと戻つていった。

だが、これを機にミユリは改めて『魔女』として、学園生たちから恐れられるようになった。今度はからかいや比喩ではなく、文字通りの意味での『魔女』として……

「進級試練、ですか……？」

魔法学部の指導委員であるタントフ教授は、相談にやってきたクジマの問いかけを、そう言うて繰り返した。

「うむ。儂は、ミユリを更に鍛えようと思っておる。そのために、あの娘を魔導士課程へと進ませたい」

魔導士課程は魔術を学ぶ学生の中でも、ごくごく限られた者だけが進む高度なコースだ。

その指導内容はもはや教育の枠を越えて、危険を伴う命がけの修行となる。

その指導に当たる能力を持つ教授も限られていることから、実際にその課程に進む学生は、数年に一人いるかないかだった。

命を落とす危険のある魔導士課程に進むためには、学生はその実力を証明しなければならぬ。
い。

そのために進級試練というものが行われていた。

その内容は、ずばり『実戦』だ。

強力なモンスターを召還し、それを打ち倒すことで、初めて黒魔術師はその力量を認められ

る。

だがそれが危険なものである以上、担当教授の一存でその試練を行うことは出来ない。責任の所在を明らかにするため、学部内の指導委員会の同意と、誓約書類等の準備が必要となる。

そのためにクジマは、ミユリに対してその進級試練を行う許可を取るために、こうして居心地の悪い指導委員の部屋までやってきたのだった。

「しかし、ミユリ・オクヤマはすでに今の時点でも十分に優秀な力量を持っていますよね。攻撃力においても、正確性においても、彼女ほどの数値を出した生徒は過去十年間にはいなかった。何も魔導士課程に進まずとも、このまま卒業させて、現場に送り出す方が良いのではないですか？ 軍隊でも一般企業でも、彼女なら引く手あまただと思いますが……」

タントフがそう言ったのは、優秀な人材を現場に斡旋することで学園側にも利益が入るからである。だがクジマにとってはそんなものは関係がない。

「ふん、指導委員という立場におりながら、お主はわかっておらんのか。ミユリはまだ、その

持てる力の十分の一も發揮してはおらん。過去十年間だと？　笑わせるな。儂はあの娘を、向こう百年は並ぶ者のない大魔法使いに育てねばならん」

クジマの口から出るスケールの大きな目標に、まだ若いタントフ教授は怪訝そうな表情で目をぱちくりとさせている。

だがクジマの言っていることは、決して大袈裟では無かった。

上位魔法と呼ばれる魔法の術式がある。

それらは最高レベルの魔法使いのみが扱える、大きな力を持った魔術だが、ミユリは学生でありながら既に、その上位魔法をいくつか使うことが出来る。

そしてここに『レビテイト』と呼ばれる魔法がある。

それは高位の魔法使いの間で伝えられる上位魔法のひとつであるが、実際には誰も見たことのない魔法である。

魔術書によれば、『レビテイト』は己の体重を無とし、歩くようにして空中を舞い、移動するというものであるが、国中を見渡しても、この魔法が使える者は誰一人としていない。故に

その実在が疑われているという、いわくつきの魔法であつた。

魔女と言えば、帚に乗つて空を飛ぶというのが一般に広まっているイメージであるが、実際には人間が機械の力を借りずに空中に舞い上がるのは容易ではない。一時的に自らの身体を空中に固定したり、パワーリープ等の魔法を使つて空高くジャンプすることは可能だが、重力に逆らい、まるで体重が無くなつたかのように空を舞うというこの『レビテイト』は、魔術書に説明されていながらも実現した者のいない幻の魔法として知られていた。

各地に残された魔術師ギルドの記録を遡つても、この伝説の魔法を使うことが出来たとされるのは、過去千年の間にほんの数名。それも古い記録ゆえに、信憑性があるかどうかはわからない。それだけに長らくの間、魔法使いたちの間では眉唾ものと言われ続けていたのだつた。

だがミユリは今、現実には、この『レビテイト』の魔法が使えるのである。

まだ十代の学生に過ぎない少女が、この幻の魔法を使いこなしたという事がわかれば、他の者もミユリの持つ可能性に気付き、彼女に対する進級試験の許可も降りるに違いない。

そう考えたからこそ、クジマはその日、来客たちを修練場に迎え入れ、皆のしている前でミ

ユリに『レビテイト』の魔法を実演させた。

物々しい雰囲気の中、野外修練場にやって来たのは、魔法学部の教授陣や、指導委員会の面々だけではなく、学外からも数名の名の通った魔術師や、地方魔術師協会の視察員らが訪れていた。

「これがその、ミユリ・オクヤマさんですね……いやあ、やっぱり女の子なんだなあ、この魔法を使えるのは」

皆が顔を揃えるなり声を上げたのは、わざわざ都からやってきたコールドンという名の中年魔術師だった。他の魔術師たちが怪訝そうな顔で彼の方を見る。

「ああ、失礼……私は過去に、この『レビテイト』にまつわる調査に携わったことがありますてね……使える者のいない幻の魔法だと言われていますが、過去の文献を調査していて、興味深い点に突き合ったつたんですよ。それは、この魔法を使えたとされる魔法使いが、全員女性、しかも若い女性だったということなんです……」

コールドンの言葉に、クジマは数年前に魔術ジャーナルに掲載されていた論文を思い出していた。悪くない着眼点を持った記事だと思ったが、書いたのはこの男だったか。

「この魔法はもともと、悪魔の像に処女の生贄を捧げる悪魔教団の儀式の中にその起源があると言われていますが、五百年以上前の伝承を辿っていくと、この魔法を使えたのはどうやら、乙女だけだったらしいんですね。古い記録なので仮説に過ぎなかったんですが、今、ミユリさんを見て、その仮説が確信に変わりました」

「なるほど、乙女にしか使えないというのであれば、幾人もの大魔法使いが束になっても成功せぬというの筋が通りますな……」

コールドンの説明に皆は納得した様子で、集まった魔法使いたちはそれぞれに頭を上下に動かしている。

「しかし、仮説であろうと確信であろうと、実際にやってみせねばわかるまい。この目で見るとまでは、僕は納得せんぞ」

長年にわたって『レビテイト』の存在を否定していた老魔術師が、頑固そうな顔でそうつぶやく。

クジマは傍からはほとんどわからぬほどの小さな笑みを一瞬、口元に浮かべると、ミユリに向かつて「やれ」と命令した。

「はい」

修練場の真ん中、皆が見守る中、ミユリは返事をする、呪文の詠唱を始める。その表情は、先程から眉ひとつ動いていない。

不意に、ミユリの周囲の地面から砂埃が立った。ミユリの姿勢はどことなく不自然だ。まっすぐに立つてはいるが、どこにも体重がかかっておらず、まるで直立したままベッドに横たわっているかのように見える。よく見るとミユリの足元は、ほんのりと地面から浮き上がっていた。

次の瞬間、ミユリが足を踏み出すと、まるで見えない階段でも上るようにして、彼女の身体

は上へ、上へと移動していく。

「おお……！」

見守る魔術師たちの口からため息が漏れる。

その実在さえ疑われていた幻の魔法を、今彼らは目の当たりにしているのだ。

野外修練場のグラウンドの上を、ミユリは一步、また一步と上昇し、気付けば午後の青空の中、制服姿のミユリはダンスでも踊るかのように空中を飛翔していた。

「これは……！」

先程の、年老いた頑固な魔術師が感嘆の声を上げる。

「す、素晴らしい……！」

指導委員の面々も、思わず声を上げていた。

彼らの見上げる先、空中ではミユリが制服のスカートをひらひらと揺らし、バレエのステップに似たかろやかな足取りで舞っている。そのスカートの中から白いパンツがのぞき、教授陣

の目線はそこに釘付けになっていた。

「こら、見上げるでない」

ミユリの姿に見とれている教授たちに、クジマは慌てて諫める言葉を投げかける。

だが彼らは上を向いて、ミユリのスカートの中を一心に見つめたまま、教授たちも魔術師たちも一緒になって、この幻の魔法の再現に成功した美少女に向かって拍手をし始めた。

「こ、こら、見るなど言っておるだろう」

クジマの言葉に聞こえないふりをしつつ、魔術師たちは拍手をし続ける。

だがその中で、あのコールドンという男だけが、拍手をしながらクジマの耳元で小さな声で囁いた。

「クジマ教授……実はあの論文には書かなかったんですが……レビテイトの魔法を使ったとされる女性の魔術師たちは皆、若くして死んでいるんです……ミユリさんにもそのようなことが無いといいのですが……」

「進級試験、決まったんだね」

夕刻、それぞれの授業の終わったタチバナとミユリは、いつものように中庭のベンチに隣り合わせに座り、二人だけの時間を過ごしていた。

夕暮れの中、こうして語り合うようになってから、どれくらいの月日が流れただろう。

タチバナがミユリを追ってこの王立学園に入学してきた日、このベンチの上で初めてのキスを交わしたことを、ミユリは昨日のことのように覚えていた。

「うん、来月……一ヶ月後の満月の夜だって」

ミユリはそう答えつつ、どこか他人事のような感じで、その目は遠くの空を見つめている。

「本当にやるの、ミュちゃん……？」

タチバナは心配になって、ミユリにそう問いかける。

「わからない……タツちゃん、私本当は怖い。たった一人でモンスターと戦うなんて、考えただけでも震えてしまいそう。本当はクジマ先生に言われたから、はい、って返事をしたただけなの。先生の言うことは絶対だから……」

「ミ、ミユちゃん……」

ミユリはうつむき、自分のつま先を見つめる。

その顔の下、彼女のスカートは煤けて、所々が焦げてぼろぼろになっている。

今、ミユリは一ヶ月後の試験を見据えて、実戦向けの修行を行っている。

軍事系の学生たちが剣術の修行をするのとは違い、魔法学部には運動着といったものは無い。だがクジマの課す修行内容は練習というよりはむしろ格闘だ。

だから結果的にミユリの制服は、彼女の使う炎の魔法や電撃の魔法の余波によって、短期間のうちにぼろぼろになってしまう。

「私、自分が魔導士課程に進みたいかどうかともわからない。クジマ先生は、私が歴史上に並ぶ

者のないくらいの魔法使いになれるって言う。でも私には、とてもそんなふうには思えないの……私、弱いわ……タツちゃんが居てくれないと、今にもどうにかなってしまいそう……！」

ミユリはそう言つて、タチバナの顔を見上げ、そしてベンチの上、すぐるように彼に抱き付いた。

「ミユちゃん……無理することないよ。ゆつくり考えてみよう。ミユちゃん自身の気持ちについて考えてみよう……たとえばミユちゃんは、どんな魔法使いになりたいんだい……？」

「どんな魔法使い……私が……？」

タチバナに意外なことを聞かれて、ミユリは戸惑った。自分の気持ち……？　どんな魔法使いになりたいかなんて、今まで考えたことがない。

「そう。他人の目や、クジマ先生の期待は関係ない。ミユちゃん自身は、どんな魔法使いになりたいと思つて、今まで修行してきたの？」

タチバナの問いに、ミユリはすぐに答えられなかった。

「わからない……じゃあ、タツちゃんは……？　タツちゃんは、どういう魔法使いになりたい
と思ってるの？」

タチバナは一瞬、考え込んだ。だが自分で問いを発した以上、ミユリに対して自分の答えを
言うのは当然だ。

「僕は……僕は、人を守ることの出来る魔法使いになりたいんだ。病気、怪我、争い……そう
いったもので苦しんでいる人たちを助けて、彼らの命を守りたい。そう思ったから僕は勉強を
始めた……本当は魔法をやろうと思ったのはミユちゃんと一緒に居たかったからだけど、でも
白魔法の道を選んだ理由はそれなんだ……そして、それは僕の希望に合っていたと思う……」

タチバナは夕刻の空に、少しずつ見えてきた星を見つめながら言う。
同じように空を見つめながら、ミユリがため息をつく。

「タツちゃんは立派ね……私、理由なんて考えたことなかった。ただ、人から言われるままに
……才能があるって言われて……人よりも大きな炎を作ることが出来たから……」

「でも、その炎を作ること、ミユちゃんは今までの青春を賭けてきたんじゃないのかい……？」

「えっ……？」

タチバナが不意に言った言葉に、驚いたミユリは思わず反応した。

その理由は自分でもわからない。でも彼の言う通りだった。

クジマ先生の前で、初めて炎の魔法を使ってみせた時。

まだ胸の膨らみかけた少女だった自分は、焚火程度の炎しか放つことが出来なかった。

あれから修行を重ね、ミユリは今ではその何倍もの大きさと温度を持った炎を作ることが出来る。

「私、負けたくない……」

ミユリがぼつりと呟いた。

タチバナははっとした表情になってミユリの顔を見る。

「どんな魔法使いになりたいとか、偉大な魔法使いとか、そういうのはわからない……でも、私は負けたくない……もつともつと大きな炎を作れるんだって、そう信じて……」

そう言つて、ミユリは照れたように顔を伏せ、膝枕のようにしてタチバナの足の上に頭を乗せた。

愛しい恋人の膝の上、ミユリは束の間の安らぎを味わっている。

「タツちゃん、私受けるわ……進級試験……」

タチバナの膝の上で、ミユリは甘えた声のまま、そうつぶやいた。

「シ、シルバー・グリフォンですって!？」

指導委員のタントフ教授は驚きのあまり声を張り上げた。

「そうだ。問題があるか？」

クジマは仏頂面を崩さず、そう聞き返す。

彼は今、魔法学部 の 指導委員会の元へ、ミユリの進級試験の詳細を記した書類を届けに来たところだ。その書類に書かれた、試験のために召還されるモンスターの名称を見て、タントフ教授は平静を失ったのである。

「問題も何も、シルバー・グリフォンだなんて、そんな強力なモンスターに、学生が勝てるわけがありません！」

「ミユリなら勝てる」

気色ばむタントフに対し、クジマは平然とした表情でそう答える。

「勝ち負け以前に、危険過ぎます。万が一、そのような強力なモンスターが試験場から逃げ出せば、大災害になってしまう」

「その時には儂が倒す」

「わからない……ミユリ・オクヤマはあなたにとっても大事な愛弟子のはずだ。それをなぜ……？ もっと弱いモンスターでも、進級試験は十分に成立しますよ？」

「前に言ったであろう。儂はミユリには、向こう百年並ぶ者のない魔法使いになってもいいのだ。そのためには、この程度のモンスターは倒してもらわねば困る」

そう言い切ったクジマの言葉に、タントフ教授は絶句し、そしてしばらくの後、意を決したように感情的に言葉を継いだ。

「クジマ先生……敢えて言わせてもらいます。あなたはやり過ぎだ。目標が高過ぎる。このような指導方針に、着いて行ける学生は居ない……学部では責任は負いかねる……もし、この試験でミユリ・オクヤマが命を落とすようなことがあれば、あなたはもう、この学園には居られなくなりますよ……！」

「儂が責任を負えばいいのだろう……？ 構わぬ。もしこの試験で命を落とすようなことがあれば、儂の弟子ではない」

クジマはそう言い放ち、責任の所在を示す誓約書にすらすらと自らの署名を書き込んだ。

魔法学部の老教授が、将来有望な特待生に危険な試練を与えようとしているという話は、学生や教授たちの間だけでなく、学園の外、サトの町の人々の間にも広まっていた。

学園生の父兄たちの中には、そのような狂った教授に自分たちの子弟を預けるわけにはいかないと、クジマの解雇を求める署名運動を行う者まで現れた。

シルバー・グリフォンは、経験を積んだ高レベルのパーティーでもやつと倒せるかどうか、と言われる強力なモンスターだ。

グリフォンの中でもさらに王族にあたる存在であり、通常のグリフォンよりも強い魔力を持ち、知能は人間のそれを凌駕すると言われている。

そのような危険なモンスターを相手に、才能を持った特待生とはいえ、実戦経験の無い女子学生がたった一人で戦うなど、狂気の沙汰という以外には無かった。

だが、誰もが驚愕し、怒り、批判の声を上げる中、徹頭徹尾、冷静にこの事実を受け止めよ

うとしている人間が、一人だけ居た。

それは他ならぬミユリの恋人、タチバナだった。

タチバナは図書館でモンスターに関しての文献を調べ、シルバー・グリフォンについての情報を集めると、冷静にこの戦いの行方を見極めようとした。

（駄目だ、ミユちゃんは勝てない……）

文献に書かれたシルバー・グリフォンの能力を元に、戦いをシミュレートしてみるものの、やはりどうやっても、ミユリのヒットポイントの方が先に尽きてしまう。

ミユリの強力な魔力はもちろんタチバナも知っている。

ミユリほどではないにしろ、タチバナも才能ある魔法使いだ。白魔法と黒魔法の違いこそあるが、ミユリの魔力が、他の学生たちはおろか、既に教授たちの魔力すら越えていることは、タチバナも以前から察知している。

だが、そのミユリの強力無比な攻撃魔法を以てしても、たった一人でシルバー・グリフォン

に勝てるとは思えない。

問題は攻撃ではなく、防御だった。

敵の攻撃を躲するための魔法はいくつもあるが、か弱い少女に過ぎないミユリは、生身のままではシルバー・グリフオンの一撃から身を守れないのだ。

ましてやミユリは実戦は初めてだ。

それはどう考えても、公平な条件の戦いとは言い難かった。

タチバナは、こんな不条理な戦いを計画したクジマの意図を考えた。

クジマ先生は、ミユリを向こう百年並ぶ者のない大魔法使いにすると言っているらしい。

幼馴染であるタチバナは、ミユリのことを客観的に見ることが出来ないため、ミユリに本当にそんな力があるのかどうか確信が持てない。

だが、クジマの言っていることがまったくの嘘だとも思えない。

幼い頃からミユリのことを見ているタチバナには、彼女の魔術の才能について、思い当たることはいくつもあるからだ。

ミユリにはまだ隠された魔力がある。

クジマはミユリを窮地に追い込むことで、その隠された魔力を引き出そうとしているのかも
しれない。

そのためには、彼女の命を危険に晒すことすら厭わない。

タチバナには、クジマの意図がそうとしか考えられなかった。

だが、ミユリのことをかけがえのない恋人として思ってきたタチバナにとっては、彼女の命
をそのような危険に晒すわけにはいかなかった。

（僕はミユちゃんを守る……守らなければいけない……）

進級試験まで、残された時間は二週間。

その日から、タチバナの不眠不休の努力が始まった。

翌週、クジマは魔法学部B棟の小教室で、自らの担当する『一般魔術理論』の講義を行って
いた。名称こそ一般と付いているが、その内容はまったくもって一般的とは言えず、単位の取

りづらい難授業として学生たちから敬遠されている授業である。

「で、あるからして、この α はこの ω となり、そして言葉は無となり、無は力を現す……」

黒板に説明を書き終え、クジマが教室を見渡すと、そこに血走った目でこちらを睨みつけるように見ている一人の学生が居た。

もともとこの授業を受ける学生の数はい少ない。その少数の学生の中に、弟子のミユリの恋人であるタチバナの姿を見つけるのは、至極容易いことである。

（あのボンクラか……）

なぜ、タチバナが自分のことを睨みつけているのか、想像はついた。

彼は、ミユリを危険な目に合わせようとしている自分のことが許せないのだ。

恐らくは何日もの間、眠っていないのであろう、タチバナのその血走った目をまっすぐに見据え、クジマは彼の気持ちを推し量ろうとした。

（きつと苦しんでいるのであろうな……ボンクラなりにミユリを救おうと考えているのか……）

大事な恋人の命が危険に晒されるのだ。気持ちにはわからんではない。

だがクジマに言わせれば、タチバナの存在こそがミユリの成長を妨げ、結果的にその命を危険に晒しているのだ。

確かにミユリは若き魔法使いとしてその力を伸ばし、あらゆる試験で優秀な成績を上げている。

周囲の教授たちも、この十年間で最も優秀な生徒として、ミユリの能力を絶賛している。

だがクジマの見立てでは、ミユリはもともと大きく成長するはずだった。

並ぶ者のない、絶大な力を持った黒魔術師として、師匠のクジマを遥かに越える魔法使いになるはずだった。

それが、過去十年などという小さな秤で足りる程度に収まっているのは、ミユリの心の中にある甘さ故だった。

タチバナという存在がその身近に居るからこそ、ミユリはその甘さを断ち切れず、黒魔術の真髄である冷徹な攻撃性を手にすることが出来ないでいるのだ。

その冷徹さを手にするためには、ミユリを窮地に追い込み、彼女自身の命を天秤にかけさせるより他に無い。

そう考えて、クジマはミユリに試練を与えることを決意した。

道を究めんとする以上、もしその真髓を掴むことが出来ぬのであれば、命を失う方がよい。クジマは本気でそう考えているのである。

それは紛れも無い危険思想であったが、クジマの持つ魔法使いとしての激しき矜持は、中途半端な妥協を良しとしなかった。そもそも危険を踏み越えずして、真実など掴めるはずがないではないか。老いたとはいえ、大魔法使いであるクジマにとって、それは譲ることの出来ない信条だったのである。

「 α は ω となり、言葉は無となり、無は力を現す……」

タチバナは血走った目を必死に見開いて、クジマの講義の内容を何度も復唱し、ノートに書き留めている。

そのタチバナのノートの記述が目に入り、クジマは一瞬、驚いた表情になる。

「何……？」

老いたとはいえ、クジマの目は衰えてはいない。

タチバナの手元、ノートにぎつしりと書かれた内容を見て、クジマは彼が何をやるうとしているのかを理解した。

ふふ、そういうことか。まさかこの儂の聞く者もおらん魔術理論が、このボンクラにヒントを与えることになるうとはな。

（よからう。今のは見なかったことにしてやろう。ミユリと共に、やれるというのならば、やってみるがいい……）

クジマは口元の笑いを噛み殺しつつ、何事も無かった態度を装って、教室に居る数名の学生を相手に講義を続けた。

進級試練の夜。

ミユリは寄宿舎を出ると、魔法学部の一番禺にある『試練の館』へと向けて歩きだした。その格好は制服のスカートにブラウスという、この学園の通常の夏服のままである。

慣例として進級試練の際にはひとつだけ武器を携行することが許されているが、ミユリは何も持っていない。

攻撃魔法を放つための杖を持つことも考えたが、ミユリはもともと杖に頼らずとも魔法を発動できる。ましてや実戦では、なまじ杖に頼るよりも、自らの腕に頼る方が迷いが少ない。そう考えて、ミユリはまったくの徒手空拳で、この戦いに臨もうとしていた。

夜の闇の中、ほんのりと街灯に照らされた石畳の道をキャンパスの奥へと進んでいくと、そこにタチバナが立っていた。

「タツちゃん……!」

ひどいじゃない、この一週間、顔も見せないで……

ミユリはその言葉が喉まで出かかった。

けれど、髭が伸び、汗で汚れたその顔と、徹夜明けのように赤くなった目を見て、ミユリは

その言葉を飲み込んだ。

恋人が、自分のために何か必死の努力をしてくれたことを、ミユリは彼の顔を見て察したからである。

「ミユちゃん……」

タチバナはミユリに歩み寄り、その手をそつと握る。

「必ず勝つて、戻って来てね」

タチバナはミユリにそつとキスをし、そしてぎゅつと抱き締めた。

こんなふうに力強く抱き締められるなんて、今までに無かったことだった。

シャワーも浴びていないのか、ミユリはタチバナの体臭を感じたけれど、気にならなかった。

「それから……」

タチバナは肩にかけた鞆から、何かを取り出した。

「この子にもキスをしてあげてほしいんだ」

タチバナが取り出したのは、人のような形をした物体だった。

布で出来た、ブラウスを着て、スカートを履いた、髪の長い……女の子の人形……？

「やだ、何これ……？」

ミユリは思わずくすくすと笑いだした。

人形はとても不細工な作りで、たどたどしい不器用な線で顔が描かれている。タチバナがその短い指に針と糸を持って、この顔を刺繍したかと思うと、ミユリは笑わずにはいられなかった。

「まさかこの人形を私の形見にするって言うんじゃないわよね？」

笑い過ぎたミユリは片目から涙を拭きながらそう冗談を言う。

「はは、その逆だよ。この人形が、ミユちゃんに幸運を運んで来てくれるんだ」

言われる通りにミユリが人形にちゅつとキスをする、タチバナはその人形を鞆の中へと戻した。

「ああ、面白かった……なんかもう、どうでもよくなつてきちゃった……」
ミユリはまだ笑いながら涙を拭いている。

笑いが収まり、二人は何も言わずに見つめ合った。

試練の時間が迫っている。もう二人には、話す言葉は残っていない。

「じゃあ、タツちゃん、私行くね」

ミユリがそう言い、くるりと向きを変える。

「ミユちゃん……!」

タチバナが思わず呼びかけた。

「なあに？」

振り向いたミユリが聞き返す。

「また……また明日ね……！」

タチバナは直立不動のまま、やっとそれだけの言葉を紡ぎ出す。

「うん、また明日……！」

振り向いた姿勢のまま、ミユリは笑顔でそう言うと、前に向き直り、そして彼女は『試練の館』へと歩いて行く。

館の扉が重々しく開き、そして夏服姿のミユリは、その扉の向こうへと消えていった。

（よかった、ちゃんと魔法をかけることが出来て……）

タチバナはほっと胸を撫で下ろす。

馴染みの薄い白魔法だからか、彼女はタチバナが魔法を使ったことに気が付いていないようだった。

（後は、組んだ術式がちゃんと動作してくれば……）

実地検証をしている暇など無かった。

だが確認は何度も行った。

この魔法が予定通りに効果を発揮してくれば、ミユちゃんにも勝利のチャンスがあるはずだ……

タチバナは自分に課した役割を果たすため、その場を立ち去り、寄宿舎の部屋へと戻って行く。

だがそんな彼らの様子を、物陰から眺めている男達が居たことには、ミユリもタチバナも気が付いていなかった。

（体験版ここまで）

© 八ヶ岳昌司 2020年

ブログ 寝取られと純愛（現在休止中）

ntflove.com

表紙絵 ジュエルセイバーFREE

<http://www.jewel-s.jp>